

研究主題 社会とつながり未来を創る子供の育成

～社会的事象の見方・考え方を働かせ、主体的に問いを追究する社会科の学習を通して～

I 団体の概要

昭和26（1951）年の発足から70年間以上続く歴史ある小学校社会科の研究団体です。現在、第3学年から第6学年まで四つの研究部会に分かれて、社会科授業の実践研究をしています。教材開発、指導方法の工夫、評価の充実等を図りながら、各学年部会（第3～第6学年）で年2～3回ほどの研究授業を中心に、これからの社会科授業のあり方について研究を深めています。令和5年11月実施予定の全小社研全国大会東京大会（4会場で実施）に向けて連携・準備を進めています。

【都小社研ホームページおよび二次元コード】

<https://www11.schoolweb.ne.jp/swas/index.php?id=1350008>



II 研究のねらい

社会的事象の見方・考え方を働かせながら、児童主体の問題解決的な学習を展開し、知識及び技能、思考力・判断力・表現力等を統一的に育む実践を積み重ね、主題および理論の充実を図る。

III 研究の内容

○教材の開発や教材の分析

- ・東京のよさを再認識し、都民として愛着がもてる東京らしい教材
- ・人々の生活や社会的事象の関連について、共感的に迫り、見方・考え方を働かせる教材
- ・人の働きを共感的に捉える教材
- ・社会の課題を捉え、発展や関わり方を考える教材

○研究理論に基づいた授業づくり

- ・主体的に問いを追究する工夫
- ・社会的事象の見方・考え方が働く学習活動の工夫
- ・学びを確かにする評価の工夫

○各学年部会

【3年部会】

自分と地域社会とのつながりを意識しながら問いをつかみ、見通しをもって主体的に追究し、地域社会の一員として自分にできることを考える授業づくりに取り組んでいます。

【4年部会】

東京都のよさや特色を生かした教材を工夫・開発し、問いをもち、見通しや振り返りを大切にしながら、社会的事象の意味やこれからの関わり方を考える授業づくりに取り組んでいます。

【5年部会】

我が国の国土や産業について、問題意識を高めて問いを見だし、解決の見通しをもって内容や方法を選択したり対話を充実したりしながら追究し、多角的にこれからの社会の発展を考える授業づくりに取り組んでいます。

【6年部会】

政治、歴史、国際社会について、子供自らが問いをもち、見通しをもって主体的に追究し、多面的・多角的に考え、議論しながら考えを深めていく授業づくりに取り組んでいます。

【今後の大会予定】

令和5年度 全国小学校社会科研究協議会研究大会東京大会

日時: 令和5年 11月9日(木)～10日(金)

場所: 浅草公会堂(11/9)

11/10 新宿区立四谷小学校 小金井市立小金井第一小学校

11/10 中央区立日本橋小学校 世田谷区立代沢小学校

Ⅳ 研究の成果と課題

<成果>

○地域の特色を生かした東京らしい教材を開発し、主題の実現に迫ることができた。

○学習指導要領の分析等を踏まえ、単元の構想を作成した。そして、それを基に、見方・考え方を働かせ、主体的な学びを促す指導計画を作成し、授業への具現化を図ることができた。

○令和5年度全小社研東京大会を見据え、各部会の垣根を超えた「オール東京」の体制を確立し、研究の推進を図ることができた。

<課題>

●更なる理論の明確化と、より一層の授業への具現化の推進

<連絡先>

団体名		東京都小学校社会科研究会
代表者	所属	板橋区立上板橋第四小学校
	職氏名	校長 和田 幹夫
	連絡先	03-3932-6317
事務局	所属	青梅市立新町小学校
	職氏名	校長 塚田 直樹
	連絡先	0428-31-0268



【都算研のシンボルマーク】

本研究会創立70周年記念時に作成したピンバッジである。円の中にルーローの三角形をデザインし、その中にある4つの三角形は、「数学的活動」を中心に「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」を表している。

研究主題 「数学的に考える資質・能力を育てる指導と評価の在り方」

【団体の概要】

東京都算数教育研究会（都算研）は、昭和25年（1950年）に発足した研究会である。算数教育の推進ならびに会員相互の研鑽を図るとともに、東京都の算数教育振興に貢献することを目的としている。研究の成果を東京都の全ての子供たちに還元するために、東京都教育委員会からの認定を受け、活動を発展している。

組織は、庶務部・会計部・研究部・発表部・編集部・育成部の6事業部で構成している。

研究活動は、研究部の4委員会（研究委員会・授業研究委員会・実態調査委員会・資料委員会）が、それぞれ課題を設定して推進し、毎年の研究発表会や授業研究会の開催及び会報や研究物の発行等で研究過程や成果を発信している。また、今年度で17期を迎える独自の研究員制度を設け、これからの東京都の算数教育を牽引する人材を育成している。

【研究主題】

過去20年以上にわたり、「数学的な考え方」の育成に焦点を当て、その指導と評価についての研究に取り組んできた。令和4年度は、学習指導要領の「数学的な見方・考え方を働かせ、数学的な活動を通して、数学的な資質・能力の育成を目指す」という目標を達成するために、研究主題を「数学的に考える資質・能力を育てる指導と評価の在り方」とした。東京の算数教育をリードする役割を担いながら、令和の日本型学校教育の実現に向け、指導の改善・充実を図っていく。

【研究委員会】

学習指導要領に基づき、日本の算数教育の動向を見据えながら、都算研全体の研究主題「数学的に考える資質・能力を育てる指導と評価の在り方」について、研究主題の達成に迫るための理論研究を進めた。具体的には、単元の指導と評価の計画を作成するとともに、目指す児童の姿を指導と評価の計画において、『期待する児童の姿』として具体化した。また、数学的な見方・考え方を働かせた児童の姿に迫るための教師の役割について考え、実践を通してその効果と児童の実態を適切に評価し、その後の指導に生かしてきた。

〔検証授業（●は研究発表会〔会場：稲城二小〕）〕

○6年「分数のわり算」足立区・千寿桜小：指導教諭 河合知里

●3年「円と球」私立明星小：教諭 河合智史

○4年「分数」豊島区・富士見台小：主幹教諭 大賀康之

〔成果（まとめ）〕

数学的な見方・考え方を基に「指導と評価の一体化」を図る単元計画・授業づくりを行うことで、単元における「期待する児童の姿」や教師の役割を明確にすることができた。実際の授業では、児童の姿をどう把握し、それをどう生かすかを一体として考え、指導の手だてや個別の支援につながった。

【授業研究委員会】

算数の授業実践に志をもつ教員を募り、教材の本質を捉えた授業の在り方を探究し、授業を提案した。また、その成果と課題を研究紀要にまとめた。研究主題を「数学的な思考力、判断力、表現力を育てる授業」と設定し、都算研の進める授業づくりを普及・啓発した。

〔授業研究会（●は研究発表会〔会場：稲城二小〕）〕

○2年「計算のくふう」日野市・日野第三小：主任教諭 田畑哲司

○6年「円の面積」府中市・府中第五小：主幹教諭 榎本直人

○1年「わかりやすくせりしよう」北区・王子第五小 教諭 小川功介

●1年「なんじなんじはん」江戸川区・小岩小：主任教諭 竹上晋平

●5年「分数と小数、整数の関係」練馬区・大泉二小：主任教諭 大橋直

○5年「速さ」太田区・おなづか小：主任教諭 杉山史典

〔成果（まとめ）〕

数学的な思考力、判断力、表現力を育成するためには、児童に数学的な価値のある内容について十分に思考、判断、表現させる授業づくりを行う必要がある。その授業において数学的な見方・考え方から数学的な価値は何か、また、その指導の手だてについて研究を進め、授業提案をすることができた。

【実態調査委員会】

都内小学校児童を対象に、算数の学力実態調査を実施し、定着の状況や誤答分析から、東京都の算数教育の成果と課題を明らかにしている。本調査は、昭和39年から続く歴史のある調査である。令和3年度からは、現行の学習指導要領に対応するため、全体的に整理し直された「A数と計算」「B図形」「C測定（下学年）」「C変化と関係（上学年）」「Dデータの活用」の5つの領域を基に、「数と計算・データの活用」「図形・測定・変化と関係」の2通りの問題で調査を実施することとした。コロナ禍で実施した昨年度は、「数と計算・データの活用」領域の問題で調査を行い、各学年約4万人、全体で約24.5万人分のデータが集まった。今年度は、「図形・測定・変化と関係」領域の問題を、これまでの調査結果との比較ができるよう、令和元年度実施の「量と測定・図形」領域の問題を基に、領域の内容に合わせて新たに開発した問題も加えて作成し、調査を行う。

[成果（まとめ）]

令和3年度実施の学力実態調査の集計結果と考察を研究発表会にて報告し、冊子を各地区に配付した。「A数と計算」「Dデータの活用」領域に関するつまずきの分析と指導の手だてを示すことができた。

【資料委員会】

実態調査委員会が実施し、その集計結果の考察を基に、正答率の低かった問題を取り上げ、児童のつまずきの要因を探り、授業での検証と協議を重ね、児童のつまずきを改善する学習指導案と指導資料を作成した。

[○検証授業並びに学習指導案及び指導資料の作成、●研究発表会(会場:稲城二小)]

- 1年 ずをつかってかんがえよう（日野第六小・熊田、桜野小・米倉）
- 2年 わかりやすくあらわそう（浜田山小・早川、矢口西小・吾郷、港南小・嵐）
- 3年 倍の計算（南陽小・山崎、下鎌田西小・吉武、千歳小・瀧藤）
- 4年 分数（立野小・竹内、湯島小・鎌田、志村第三小・田口）
- 5年 「割合」と「割合とグラフ」（希望丘小・原、三園小・青柳、松枝小・田中）
- 6年 分数のわり算（志村小・松田、両国小・田中、前原小・遠藤）
- 2年 時刻と時間 港・港南小：教諭 嵐一寛

[成果（まとめ）]

資料や教材の検討、模擬授業を踏まえての協議を実施し、充実した指導資料を作成することができた。また、学習指導要領の改訂に伴い、算数科の領域構成が見直されたため、D領域（データの活用）の内容について、研究を行い、実践資料に反映することができた。

【育成部】 [研究員による研究推進と教員の育成]

各地区の小学校算数教育研究活動の中核となる教員を養成し、東京都の小学校教育の充実に資することを趣旨として研究活動を行っている。

月例会	設定した研究主題を実現するための研究授業及び考察
夏季講座	夏季休業中の研究内容の中間発表及び指導を受けること
研究発表会	授業公開・研究発表・研究協議等による成果の発表

[研究主題] 数学的な見方・考え方を働かせ、探究する児童の育成
～単元を貫く問いと連鎖した問いに視点を当てて～

問いを軸とした授業の展開を通して、数学的な見方・考え方を働かせ、探究する児童の育成を目指した。単元を貫く問いの解決を目的とし、学習の過程で生まれた連鎖した問いの解決を通して、学習したことを統合・発展させながら新たな問題を次々と見いだすことができる児童を育成した。

[実践事例] 5月：2年長さの単位「整理整頓マスターに注文書を書こう」、6月：3年余りのあるわり算「マスレクをしよう」、7月：6年対称な図形「美しく整って見えるマークをつくろう」、9月：6年拡大図と縮図「校庭に大きな校章をかこう」（以上、前期に実践した事例）

※詳しい研究の内容と成果は、研究紀要や都算研のHPをご覧ください。

[<http://tosanken.main.jp/>]

<連絡先>

団体名		東京都算数教育研究会
代表者	所属	新宿区立牛込仲之小学校
	職氏名	校長 早藤 基代孝
	連絡先	03-3358-3762
事務局 (研究部)	所属	あきる野市立東秋留小学校
	職氏名	校長 田中 淳志
	連絡先	042-558-1126

研究主題 自然と向き合い、多様な考えを受け入れ、主体的に問題を解決する理科学習

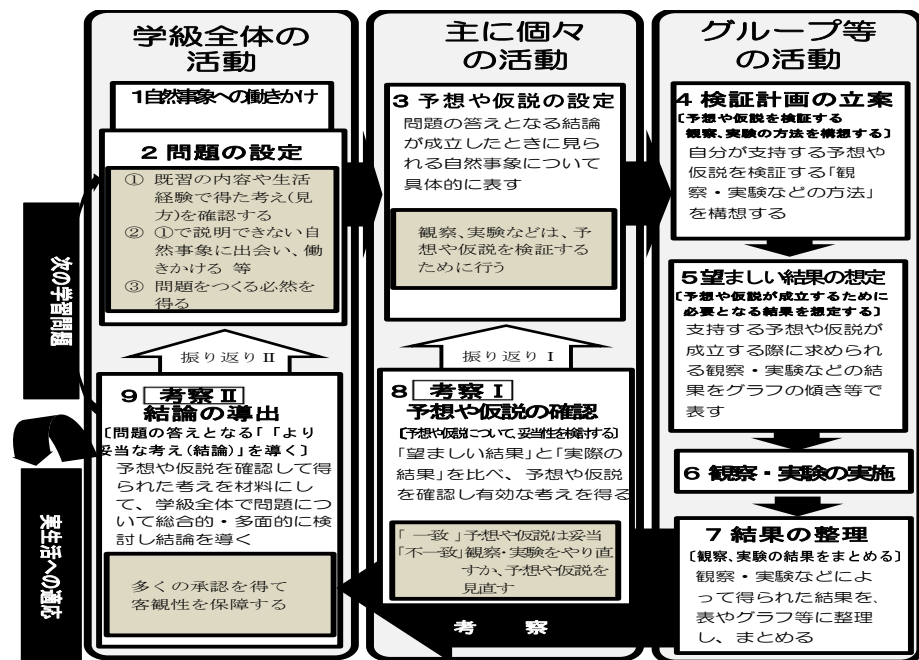
～評価を基盤とした指導による資質・能力の育成～

I 団体の概要と取組

東京都小学校理科教育研究会(都小理)は、理科教育の充実・発展に資するため、各区市町村教育研究会理科部会と連携し、研究・研修、人材育成、調査、広報等の諸活動に取り組んでいる。4つの領域別研究推進委員会(エネルギー・粒子・生命・地球)において実践研究を重ね、2月に都小理研究発表会を開催し、研究成果を広く周知する。

II 研究の内容

課題1 理科の見方・考え方を働かせて、資質・能力を育成する指導方法の工夫



〈都小理型 問題解決のプロセス〉

『都小理型 問題解決のプロセス』を学習活動の基盤とする。そのうえで、個々の子どもが有する「見方・考え方」を十分に働かせることができるよう授業をマネジメントし、生きて働く知識・技能の習得、思考力・判断力・表現力等の育成、学びに向かう力、人間性等の涵養を通じ、バランスよく子どもの一人一人の資質・能力を育むための指導の工夫を図る。

課題2 子どもの学習状況を分析的に見取り、指導改善に生かすための学習評価の工夫

子どもにとっての学習評価は、自らの学習を振り返り、次の学習へ向かう動機付けとしての働きをもつ。また教師にとっての学習評価は、「子どもにどのような力がどの程度身に付いたか」という自らの指導の成果を適切に捉え、指導の改善につなげる働きをもつ。したがって、教育課程や、指導方法の改善と一貫性のある取組として学習評価を進めていく必要がある。評価を行うに当たっては、「指導と評価の計画」を作成することとし、『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料(国立教育政策研究所 令和2年3月)を活用する。

課題3 一人1台端末を活用した指導方法及び学習評価の工夫

GIGA スクール構想の趣旨に照らし合わせて、ICT の効果的な活用を図る。その際、課題1及び課題2への取組の過程において、一人1台端末の効果的な活用を工夫する。例えば、観察・実験の写真や動画による記録、他者の意見の収集、インターネットから得た情報等を活用するなどして、根拠のある結論を導き出す等の学習活動を設定することで、子どもの考えの深まりの可視化を図る。

III 研究の成果

① 「理科の見方・考え方」を働かせて、資質・能力を育成する指導方法について研究を深め、授業実践として提案した。

〈問題の設定の場面〉



上流と下流の川の様子（音なしの動画）を比較することで、子どもは川を流れる水の量の違いなどに着目し、問題を見いだした。

〈考察の場面〉

結果の共有→考察Ⅰ→考察Ⅱ

結論
生物が生き続けるために必要な水は様々なものと関係しながら地球上を循環している。



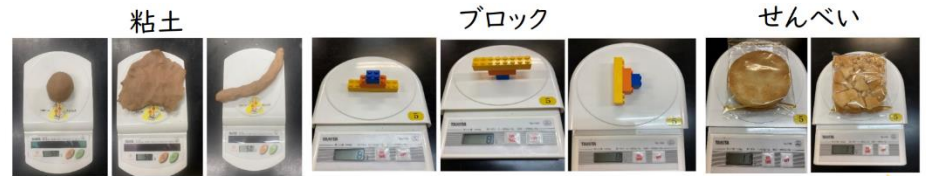
結論を導きだした後、「水の関わり」についての重要な事柄を選び、図に整理することで、子どもは、「水は様々なものと関わりながら地球上を循環している、めぐっている」という関係をつかむことができた。

②これまでのいわゆる「指導計画」に代わり「指導と評価の計画」を作成し、「指導と評価の一体化」を図るための適切な指導方法・評価方法について、授業実践として提案した。

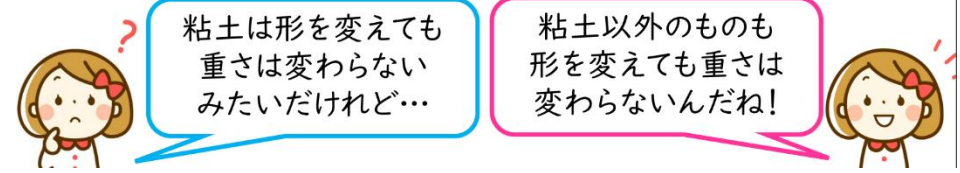
指導と評価の計画	
特徴的な児童の学習状況を確認する場面 10時間 児童全員の観点別の学習状況を記録に残す場面 6時間(○印) 全13時間	
○主な学習活動 □見方を働かせた児童の反応 ■考え方を働かせた児童の反応	重点 評価方法及び留意事項 ◇指導に生かす評価 ◎記録に残す評価 観点【方法】 ・支援
一次 1時 ○人（私たち）が生きていくために必要なものについて考える。 ・息をするから空気は必要だ。 ・栄養を体に取り入れるためには食べ物がないといけない。 ・震災の時に、水が必ず必要だと聞いたことがある。 ・住む家やすみかも必要だと思う。 ○生きるために必要なものについて話し合う。 ・すみかなくても生きていけると思います。 ・水や食べ物体の中に取り入れないと生きていけないから絶対に必要だと思います。 ・水を飲まないで生きていけないと思います。 ・空気がないと生きていけない。	【既習の内容】 ・人や他の動物は酸素を取り入れて、二酸化炭素を出している。 ・食べ物は消化され、吸収されている。 ・血液が酸素や二酸化炭素、栄養を運んでいる。 ・植物は光合成によって、二酸化炭素を吸収し、酸素を出している。 ・児童の気付きを「空気」「水」「食べ物」の3つの視点で整理していく。 ・これまでに学習した生き物を想起させる。 ・複数の生き物を対象に比較しながら考えることで、生物の周りの環境について捉えていく。 主 ◎主体的に学習に取り組む態度①【発言・記述分析】 生物が水や空気などの周囲の環境の影響を受けたり関わり合ったりして生きていることに興味・関心をもち、自ら生物と環境の関わりを調べているかを確認する。

「確認する」「評価する」等メリハリの利いた評価活動を意図的・計画的に実施できた。

③一人1台端末を活用した効果的な学びの把握について提案した。



粘土以外のものの形と重さについて調査→記録



IV 今後の課題

- ①「評価を基盤とした指導」について授業実践を通して検証し、子どもの資質・能力を育むための改善・充実を図る。
- ②評価基準、特にA基準の設定に係る考え方について研究を深める。
- ③一人1台端末を活用した効果的な学びについて研究を深める。

V 今後の活動予定

— 都小理研究発表会 —

日時；令和5年2月9日(木) 於；江戸川区立二之江第二小学校

・実践授業 ・研究協議 ・講演

講師：文部科学省初等中等局教科調査官 有本 淳 先生

団体名		東京都小学校理科教育研究会
代表者	所属	府中市立南白糸台小学校
	職 氏名	校長 西尾 克人
	連絡先	042-365-5381
連絡先	所属	板橋区立赤塚新町小学校
	職 氏名	校長 田中 薫子
	連絡先	03-3977-7811

研究主題 新たな価値の創造 ～深い学びの実現を目指して～

I 研究の概要

本研究会では、どのような世の中であっても、その変化に合わせて、価値や意味を創り出したり、更新したりしていく子供たちの育成を目指し、生活科・総合的な学習の時間の充実を図る研究を進めていくために、研究主題を「新たな価値の創造」とすることとした。また、より生活科・総合的な学習の時間の特質を重視した研究にしていくために、「深い学びの実現」を副主題とし、それぞれの視点から以下のように分科会を設定している。

令和4年11月「第31回 全国小学校生活科・総合的な学習教育研究協議会 東京大会」において、7つの分科会が分科会提案を行った。

分科会	各分科会の研究主題
A（生活）	深い学びを実現するための環境構成とカリキュラム・デザイン
B（生活）	人との関わりを通して新たな気づきを生み出す指導の工夫
C（生活）	生活科の深い学びを支える表現活動の工夫 ～逆向き設計を活用した手立てを講じて～
D（総合）	質の高い課題更新から始まる深い学び ～子供の熱量が高まるブレークスルー～
E（総合）	学習活動の振り返りと指導の工夫 ～発達段階をふまえて～
F（総合）	子供の学びの必然性から生まれる多様な表現活動
G（生活・総合 合同）	「その時子供が動いた」生活科・総合的な学習の時間の単元 ～「気づき」「探究」の質的向上を目指して～

II 7月研究会の事例 B分科会

「人との関わりを通して、新たな気づきを生み出す指導の工夫」

第1学年 生活科「なつと あそぼう」（内容(5)(6)）

日野市立日野第一小学校 浅見 美之 指導教諭

単元目標

夏の自然を観察したり、身近にある物を使ったりする活動を通して、身近な自然の違いや特徴を見付けたり、遊びや遊びに使う物を工夫してつくったりして、身近な自然の様子や変化、それを使った遊びの面白さや不思議さに気付くとともに、身近な自然を取り入れて自分の生活を楽しくしたり、みんなと楽しみながら遊びを創り出そうとしたりすることができるようにする。

本単元における研究主題に迫る手だて

研究主題にある「新たな気づき」を生み出している児童の姿を以下の3つの階層に分け、これらの姿を育成するために、「人との関わり」を通して行う手だてを以下に示す。

夏遊び単元における新たな気づきの姿		
	具体的な子供の姿	手だて
③ 深まり	自分なりに特徴や価値を見出して活動を創造し、以前より夏に対する考えが深まった自分に気付いている。	自覚につなげる声掛け 「どうしてそう思ったの？」「なんで楽しかったのかな？」 「何と何を組み合わせたの？」など。 夏に対するイメージの変容を視覚化 学習前後の同じカードによる考えを比較させる。
	友達同士で新たに考えたことを試している。	子供同士をつなげる声掛け 「〇〇さんと一緒にやってみたら？」「〇〇さんがこんなことをしているよ！」など。 身近にある物を配置 ・ペン、はさみ、テープ、ストローなど。
	友達とコツや体験を伝え合って、遊んでいる。	振り返りの充実 ・形態や場所の選択、思いや願いを言語化させる支援をする。
② 関わり	遊びやそのルールを作っている。	共感・価値付け・認める声掛け 「いいね！」「なるほど！」「すごいね！」「面白いね！」「そうだね！」など。
	自分の観点で分類したり、「～みたい」などと例えたりしている。	素材のみを配置 マヨネーズ容器、ビニール袋、プリンカップ、食品トレー、牛乳パック、ペットボトルなど。 幼保小へのアンケート これまでの経験を知り、学びの連続性につなげる。
① 一人一人の認識	季節の違いや身近な物の特徴を見付けている。	幼保小へのアンケート これまでの経験を知り、学びの連続性につなげる。 クラスでの共有活動 クラス全体で夏集めをする目的意識をもたせる。

【令和4年度東京都教育委員会研究推進団体 小学校生活科・総合的な学習教育研究会】

本時の目標（14時間中の8時間目）

友達によさを取り入れたり自分との違いを生かしたりして、夏の遊びを楽しくすることができる。

展開

○本時の学習とめあてを確認する。



なつのあそびを パワーアップさせて なかよく たのしもう。

○本時の学習でやりたいことを確認し、見通しをもつ。

○夏遊びを楽しむ。

- ＜夏遊び＞
- ・シャボンだま
 - ・まとあて
 - ・ろかそうち(すなアート)
 - ・さかなつり
 - ・ふね
 - ・れすとらんごっこ

○協力して片付けをする。



○本時の振り返りをする。

成果

・気付きの階層を意識し、個々に合わせた言葉かけをすることで、活動が発展しやすくなることが分かった。

・学級の9割の児童が学習に没頭し、遊びを楽しみ、夏へのイメージが増し、夏への肯定的な見方が高まった。

課題

・学習前と後で夏へのイメージが変容しなかった児童が数名いた。そのため、振り返りで、自分の思いや願いがより表出できるように、自己内対話を充実させる等の工夫が必要である。

Ⅲ 全国小学校生活科・総合的な学習教育研究協議会 東京大会 概要

◆期日 令和4年11月10日(木)～11日(金)

* 両日とも対面開催とリモート開催のハイブリット開催

◆1日目 午後 四谷区民ホール

○ 基調提案

○ シンポジウム「新たな価値の創造 ～深い学びの実現を目指して～」

シンポジスト 田村 学 先生(國學院大學教授・元文部科学省視学官)

奈須 正裕 先生(上智大学教授)

小笠原 さちえ 先生(大田区立久原小学校指導教諭)

松原 大樹 先生(墨田区立二葉小学校主幹教諭)

コーディネーター 齋藤 等 先生(東京成徳大学特任教授・本会前会長)

○ 記念講演

「予測困難な未来を切り拓く新たな生活科・総合的な学習の時間はこう創る」

文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官 齋藤 博伸 先生

◆2日目 全日 ○新宿区立落合第三小学校 ○大田区立道塚小学校

○世田谷区立世田谷小学校 ○練馬区立開進第三小学校

○ 授業公開・協議会

○ 課題別分科会 37分科会(31都道府県)提案・協議・指導講評

○ 指導・講評

＜連絡先＞

団体名		小学校生活科・総合的な学習教育研究会
代表者	所属	武蔵野市立境南小学校
	職氏名	校長 宮崎 倉太郎
	連絡先	0422-32-3401
事務局	所属	新宿区立落合第三小学校
	職氏名	校長 清水 仁
	連絡先	03-3565-0941

◆冬季研究会（予定）◆

日時：令和5年2月25日(土)9:15～

会場：新宿区立落合第三小学校

※本研究会に興味のある方は、ぜひご参加ください。

詳しくは、本研究会HPをご覧ください。

<http://toseisouken.net/>



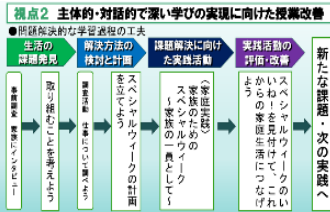
研究主題 よりよい生活を自ら創り出す子供の育成 ～「B衣食住の生活」の授業実践を通して～

I 研究主題について

今後の社会を担う子供たちには、家族・家庭生活や消費生活の変化に加えて、グローバル化や少子高齢化の進展、持続可能な社会の構築等、社会の急激な変化に対応できる力が求められている。一人一人が自立し、家族や地域の人々と共に支え合い、よりよい生活を創造することが必要である。生涯にわたって健康で豊かな生活を送るための自立の基礎に必要な力として、小学校家庭科では、生活をよりよくしようと工夫する資質・能力の育成を目指している。

日常生活の中から問題を見いだして課題を設定し、解決するために、知識・技能を身に付け、それらを活用する学習過程において、家庭科ならではの「見方・考え方」を働かせて、思考・判断・表現することが重要となる。これらは家庭生活を大切にする心情や、家庭や地域の一員として生活をよりよくしようと工夫する実践的な態度が土台となっている。生涯にわたって健康で豊かな生活を送るための自立の基礎として家庭科教育の果たす役割の重要性を自覚し、家庭科における「主体的・対話的で深い学び」を実現させ、家庭科教育をさらに充実・発展させていく必要性を感じている。そこで研究主題を「よりよい生活を自ら創り出す子供の育成」とした。

宿泊学習で見つけた
住まいの工夫を共有
し、整理・分類



「家族・家庭生活」の指導における問題解決的な学習過程

II 研究構想

以下のように構想し、授業研究に取り組んだ。

研究のねらい

生活をよりよくするために、既習の知識及び技能や生活経験を基に日常生活の中から問題を見いだして課題を設定し、解決する力を養い、主体的に実践する子供を育成するための指導の在り方を研究する。

目指す児童像

- 日常生活に必要な基礎的な知識及び技能を身に付けている子
- 日常生活の中から問題を見いだして課題を設定し、工夫し解決する子
- 家族の一員として、生活をよりよくしようと実践する子

見付け、身に付け、未来につなごう

研究の視点

児童の系統的な学びを支える指導計画（カリキュラム・マネジメント）

- 育成を目指す資質・能力の明確化
- 各題材における基礎的・基本的な知識及び技能の明確化と題材配列の工夫
- 他教科等との関連を図った指導計画
- 小中5年間を見通した指導計画

主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善

- 学習過程における学習指導の工夫
- 言語活動の充実
- ICTを活用した授業の工夫
- 実践的・体験的な活動の充実
- 個に応じた指導の充実

家庭や地域との連携・協働

- 家庭・地域との関わりを深めるための学習活動の充実
- 家族の一員として継続して実践する児童を育てる家庭連携の工夫
- 地域の人材や教材の開発

学びの成果を次の学習へとつなげる評価

- 資質・能力に沿った評価計画の作成
- 成長を実感できる評価の実施
- 児童の思考の過程を把握し、評価する方法の開発



Ⅲ 研究の内容

*公開授業

○令和4年10月12日(水) 武蔵野市
 第6学年「快適な住まい方を考えよう」
 ～B(6)「快適な住まい方」の指導の工夫～
 授業者 武蔵野市立桜野小学校 高嶋 智佳子 主任教諭
 講師 和洋女子大学総合研究機構家庭科教育研究所 工藤 由貴子先生

○令和4年11月18日(金) 練馬区
 第5学年「家族が喜ぶ食事をプロデュース」
 ～B(3)「栄養を考えた食事」の指導の工夫～
 授業者 練馬区立仲町小学校 佐藤 玲子 主任教諭
 寺島 智子 栄養教諭
 講師 元帝京大学大学院教職研究科 教授 小関 禮子先生

○令和4年12月7日(水) 北区
 第5学年「ミシンでソーイングⅡ」
 ～B(5)「生活を豊かにするための布を用いた製作」の指導の工夫～
 授業者 北区立田端小学校 北原 千咲 教諭
 講師 元帝京大学大学院教職研究科 教授 小関 禮子先生

*全国小学校家庭科教育研究会 全国大会 京都大会にて地区発表

◇町田市公立小学校教育研究会家庭科部
 「家族のためのスペシャルウィーク」～家族の一員として～
 ～A(4)「家族・家庭生活についての課題と実践」の指導の工夫～



住宅模型での検証活動



ICTの活用「家族が喜ぶ食事の献立をプロデュース」



布の合わせ方を比較して考える

Ⅳ 研究の成果と課題

1 本研究の成果

- 題材を通して重視する視点を適切に定め、目指す資質・能力を明確にして指導したことで、児童が生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、学びの質を高めることができた。
- 実体験を想起させるための教材やICT教材を工夫することで、実践的・体験的な活動が充実し、児童は活発に学び合い、思考を広げ深める姿が見られた。

2 本研究の課題

- 児童の思考を支える知識（基礎・基本となる一般解など）を明確にした後に、「思考力・判断力・表現力等」の育成に向けた活動に取り組むようにする。
- 「A家族・家庭生活」と内容相互の関連がある題材については、題材の系統に位置付けるようにする。
- 学習評価について、評価方法を行動観察とした場合は、具体的な視点を明確にして見取るようにする。

<連絡先>

団体名		東京都公立小学校家庭科研究会
代表者	所属	大田区立赤松小学校
	職氏名	校長 飯島 典子
	連絡先	03-3729-0986
事務局	所属	文京区立青柳小学校
	職氏名	校長 村上 律子
	連絡先	03-3947-2471

研究主題 一人一人の子供が自ら深い学びを実現していく体育学習
 ～研究の視点 一人一人の子供の自己評価の力を高める手立ての工夫～

東京都小学校体育研究会について

東京都における小学校の体育研究の振興を図ることを目的とした研究団体であり、小学校体育科における今日的な教育課題について、授業実践をもとに検証を行い、研究成果の普及を行っている。

研究主題（令和2～4年度）

- 体育科における「個に応じた指導の充実」をより一層推進するためには、与えられた課題に子供たちが同様に取り組む一斉一律の課題解決的な学習を改善し、子供が自ら学習課題を見だし、その解決に主体的・協働的に学習活動に取り組めるようにすることが必要であると考えた。
- このような学習活動を繰り返すことにより、子供が自ら「深い学び」を実現していけるようにするための体育科の学習指導の在り方を追究することを目的し、本研究主題を設定した。

研究の視点（令和4年度）

- 令和2・3年度の研究から、子供が主体的・協働的な学びを繰り返し、自ら深い学びを実現していけるようにするためには、子供が自らの学習課題の解決に取り組む過程において、様々な場面でやっている自己評価活動の充実を図ることが必要であると考えた。
- そこで、子供の「自己評価の力」を高める手立てを工夫することを、本年度の研究の視点とした。

研究の全体構想図



研究の方法

- ① 10の研究領域部会による年間を通した研究活動の実施
- ② 各研究領域部会による年2回の実証授業の実施
- ③ 夏季合同研究会（8月）による研究協議の実施
- ④ 月1回開催の正副部長会における情報共有と研修の実施
- ⑤ 研究発表大会の実施、研究紀要や会報の発行による研究成果の普及

研究の内容（R4年度）

令和2・3年度の研究成果

令和4年度の研究

- 「自己評価の力」を高める手だてを工夫する。
 - ・子供たちは、運動や学習に取り組む中で、今もっている力で「自己評価」を行っている。一人一人がもつ「自己評価をする力」は、それまでの学習経験等によって異なり、自己評価の場面で活用・発揮される力も異なっている。この「一人一人がもつ自己評価の力」を高めるための手立てを工夫する。
- 手だてを工夫したことによる子供一人一人の「自己評価の力」の高まりを、授業を通した子供の姿から把握する。
- 「自己評価の力」の高まりが、子供の「深い学び」の実現につながったかどうかを、子供の姿を通して検証する。

研究のまとめ

研究の成果と課題

- 子供が自ら深い学びを実現していくための体育学習の在り方について、次の視点から提言する。（成果）
 - ・子供が自ら深い学びを実現していくための学習過程
 - ・子供が自ら学習課題を見いだすための手だて
 - ・子供が学習課題を解決していくための手だて
 - ・子供と運動（課題）との出会い ・自己評価（ ）は保健領域
- 個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図る視点から、さらなる授業改善を推進していくことが課題である。

今後の予定

- 令和4年度東京都小学校体育研究会 研究発表大会
 - 令和5年2月17日（金）午後1時10分～午後4時45分
 - 区部会場：江戸川区立新堀小学校
 - 多摩地区会場：連雀学園三鷹市立第六小学校

<連絡先>

団体名		東京都小学校体育研究会
代表者	所属	大田区立田園調布小学校
	職氏名	校長 本田 幸彦
	連絡先	03-3721-8907
事務局	所属	日野市立日野第八小学校
	職氏名	校長 船山 徹
	連絡先	042-591-2411

研究主題 よりよく生きるための基盤となる道德性を養う

団体の概要

昭和 37 年に発足した本会は、今年度結成 60 周年を迎える研究団体である。東京都の道德教育の推進並びに会員相互の研鑽を図ることを目的とし、185 名の会員が力を合わせて研究に取り組んでいる。

研究のねらい

昨年度、調査部が実施した児童対象の調査では、道德の学習をしてよかったと思うことに「よりよい自分になりたいと思えたとき」と回答した児童が、前年度より 7% 増加していた。道德科の授業が定着し、一人一人の児童が自身を見つめ、振り返りそしてよりよい自分になろうと意識していることが分かる。

児童自身ではどうしようもない不透明な社会の中でも、全都 60 万人の児童に「よりよく生きること」について真っ直ぐに向き合わせたいと考え、学校の教育活動全体を通じて行う道德教育と道德科との共通の目標である「よりよく生きるための基盤となる道德性を養う」をそのまま研究主題としている。

道德科の特質を踏まえたよりよい道德授業づくりを行う「深める」ということと、都内公立小学校に分かりやすく道德授業を普及啓発する「広める」という役割を自覚し、各区市町村の道德教育研究会と連携をとりながら、東京都の道德教育を推進していく。

研究の内容

研究部 研究主題や副主題について、論理的分析を図りながら授業実践を行い、研究を深めていく。

研修部 授業研究を通して、よりよい指導方法や評価の在り方について授業実践を通して広めていく。

調査部 児童の意識、指導の工夫、評価等に関する調査の結果を基に授業研究を行い、効果的な指導法を探る。

事業部 多摩地区における各市町村の道德教育研究会と連携して研究会や研修会を行い、道德教育の推進に努める。

「研究授業での検証が都小道研の生命線である」ということを合い言葉に、各部の連携を深めながら組織的な研究活動に取り組んでいく。さらに、会計部、総務部、渉外部、広報部の各部が研究活動を支えるとともに、研究内容を都内各校へと広く浸透させ、都小道研の研究活動の統一感を図っていく。

成果と課題

《成果》 各部で研究テーマに基づく研修や授業研究を実施し、道德科指導の推進に取り組むことができた。

《課題》 一人 1 台端末の利用など、児童の実態に応じた効果的な方法を開発し取り入れていく必要がある。

令和4年度の 都小道研の主な事業

<研究授業>

例年、研究、研修、調査、事業の各部での授業研究を行っている。今年度も7回実施した。事前の指導案検討・事後の協議はオンラインを利用するなど働き方改革の視点でも工夫を試みている。授業をもとに児童の実態を把握し、研究・検証を行うことがなにより大切であると考えている。

なかでも、今年度3回の研究授業を実施した研修部では、都小道研全体の研究主題に基づき、研究主題に迫るための手だてを考え、実践を通して理論を構築していくために、授業者が明確な指導観をもち、学習指導案作成の過程で、「なぜその手だて（指導法）を取り入れるのか。」を明記し、その手法を取り入れた意図をしっかりと、授業に臨むことができるようにした。事前検討や授業後のレポートで、その指導法が効果的であるかどうかを検討するとともに、授業者の経験年数などを考慮し、授業者の思いや願いを大切に研究授業を進めている。

今後は、実施した研究授業の結果を吟味し、指導法の有効性を帰納的にまとめ、各地域に広めていく予定である。



<60周年記念講演会・懇親会>

令和4年10月8日（土）、中野区立令和小学校において、東京都小学校道德教育研究会60周年記念講演会・懇親会が行われた。前半は、「都小道研 この10年 これからの都小道研」をテーマに元会長、現会長による座談会を行った。指導要領上ではこの10年で大きな変革があった道德教育。そのなかでの都小道研の10年間のあゆみと今後の展望について考えを深めることができた。

後半は60周年記念懇親会を行った。短い時間の中、ペットボトルを持ちながらの会だったが、懐かしい仲間と直接対面して交流することができた。座談会も懇親会もとても有意義な時間となり、都小道研のさらなる発展を期す機会になった。

<連絡先>

団体名		東京都小学校道德教育研究会
代表者	所属	中野区立令和小学校
	職 氏名	校長 松井 敏
	連絡先	03-3389-1461
事務局	所属	昭島市立田中小学校
	職 氏名	校長 星野 典靖
	連絡先	042-543-1511

研究主題 よりよい人間関係や生活をつくり、自己のよさを生かす特別活動

I 研究の目的

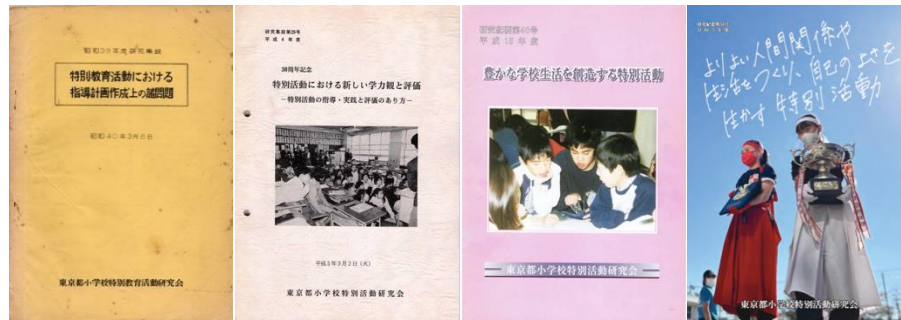
1 特別活動の指導方法の研究

本研究会は、東京都教育委員会認定の研究推進団体として、昭和37年の設立以来、特別活動の研究・発展に努めてきた。

学級活動部、児童会活動部、クラブ活動部、学校行事部の4研究部会で構成され、それぞれの研究部会ごとに研究授業を行い、より質の高い、実践的な特別活動の授業のあり方を追究し、その成果を研究発表大会や研究紀要で発信してきた。

2 設立60周年を迎えて

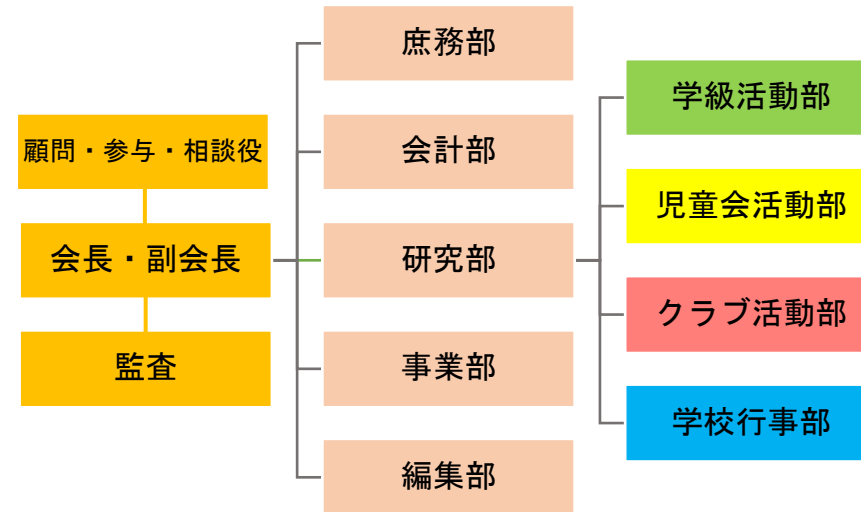
今年度は、本研究会の設立60周年である。研究紀要は昭和39年度の第1号を発行以来、毎年、その年の研究についてまとめ、発行を重ねてきた。令和3年度で第58号を数え、本研究会の長い歴史を物語っている。なお、本会ホームページ (<https://tosho-tokatsu.tokyo>) より、平成元年度以降の研究紀要を閲覧・ダウンロードできる。



第1号 昭和39年度 第30号 平成5年度 第40号 平成15年度 第58号 令和3年度

II 研究の方法

1 研究組織 部員は有志の東京都の小学校教員で構成されている。



2 研究授業による検証

本研究会の特色は、4つの研究部会（学級活動部、児童会活動部、クラブ活動部、学校行事部）が、共通の研究主題の基、仮説・主題に迫る手だてを「研究授業」を通して検証し、その成果・課題を次年度の研究につなぐ形で積み重ねてきたことにある。

新型コロナウイルス感染症の流行のため、令和2年度は「研究授業」を行うことができなかったが、令和3年度より感染症対策に努めながら、「研究授業」を実施している。

Ⅲ 研究の内容

1 研究主題

よりよい人間関係や生活をつくり、自己のよさを生かす特別活動

2 主題設定について

特別活動の目標は、3つの視点（「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」）を手がかりとしながら特別活動における資質・能力を育成することである。そこで、本研究会では、平成25年度から3年間は「人間関係形成」、平成28年度から3年間は「社会参画」に焦点を当てて研究を進めてきた。研究を進める中で、3つの視点が切り離せない相互関係にあることを再認識し、令和2年度より研究主題を「よりよい人間関係や生活をつくり、自己のよさを生かす特別活動」と修正し、3つの視点を関連させながら研究を進めている。



3 研究計画

- ①令和元年度…仮説に基づく授業実践
 - ・各活動、学校行事における「自己実現」を明確にし、共通理解を図る。
 - ・各活動、学校行事における学習過程（課題解決）を構築する。
- ②令和2年度…理論構築
 - ・1年目の研究を踏まえ3つの視点を関連付け、育成する資質・能力について共通理解を図る。
- ③令和3年度…理論・仮説の検証（1年目）
- ④令和4年度…理論・仮説の検証（2年目）
 - ・実践を裏付ける理論の検証のための授業実践
- ⑤令和5年度…汎用性・再現性のある提案



Ⅳ 成果と課題

1 成果

この2年間は、新型コロナウイルス感染症対策を施しながら、特別活動の取組が行われてきた。安易に中止や縮小するのではなく、取組のめあてを明確にし、工夫をすることで、めあてを達成できることが分かった。また、試行錯誤する中で、ICT機器の活用など、これからの時代の教育活動に不可欠な用具・手法を学ぶきっかけとなった。これまでの研究の積み重ねに加え、ウィズコロナ時代の特別活動の在り方が当然の手だてとして認識されたことも成果の一つである。

2 課題

(1) 汎用性のある手だての提案

本研究会は、特別活動の指導方法を研究し、広く東京都の教員に伝え、指導の改善を促すことが使命の一つである。誰もが取り組み、成果を上げることができるよう一般化・汎用性のある手だての提案に向けて、検証を進めていく。

(2) 手だての有効性の確認

各研究部で取り組んできた手だての有効性について、より客観的な裏付けが必要である。指導する教員の見取りに加え、児童の意識調査アンケートを行い、手だての有効性を確認していく。

<連絡先>

団体名		東京都小学校特別活動研究会
代表者	所属	目黒区立下目黒小学校
	職 氏名	校長 秋山 美栄子
	連絡先	03-3491-0332
事務局 〈庶務部〉	所属	大田区立羽田小学校
	職 氏名	校長 笹間 伸也
	連絡先	03-3741-5681
ホームページ		https://tosho-tokkatsu.tokyo
メールアドレス		info@tosho-tokkatsu.tokyo

「すべての子どもと教師が、プログラミングを楽しむ東京都にする」 ～つなげよう、広げようプログラミング～

I 団体の概要

東京都内小学校におけるプログラミング教育の普及と充実を図り、教職員資質の向上に寄与すべく、2018年度に東京都プログラミング教育推進校の教員やみんなのコードプログラミング教育教員養成塾卒業生のうち、都内小学校教員などが中心となって発足した研究会である。

2019年度より、東京都教育委員会研究推進団体に認可され、コロナ禍にあってもオンラインシンポジウム「プログラミング教育明日会議」を共催するなど、与えられた環境でも最大限の活動を実現できるよう、会員一丸となって研究に邁進してきた。

II 団体の目的

新学習指導要領に則ってプログラミング教育が取り込まれるようになって3年が経過した。しかし、その取り組み内容、密度にはまだ地域や学校、教員の間で大きな差がある。最も大きな理由は、プログラミング教育が我々教員にとって未知の領域であることだろう。これまで、教員は「一から十まですべてを把握しなければ、教えられない」と考えがちだった。しかし、プログラミング教育は、これからの時代を生きる児童が身につけるべき知識・技能、プログラミング的思考であり、教員はそのきっかけとなる機会を提供する役割を果たすに過ぎない。児童に、よりよい学びを提供できる教員の意識改革を実現するために活動を行っている。

III 研究の方法

1. GIGA スクール構想で導入されたオンライン会議ツールを積極活用し、直接顔を合わせることが困難なコロナ禍にあっても、互いに学びあい、情報を共有しあえる環境をいち早く整えた。
2. 特定非営利活動法人「みんなのコード」が2017年より始めた「プログラミング教育明日会議」を毎年1回、全国各地の教員によるプログラミング教育研究団体とシンポジウム形式で共催している。ここでの実践発表や情報共有を通して、プログラミング教育の知識やスキル向上に努めている。



(2021年 ONLINE 明日会議より、松野会長と東京学芸大学准教授 高橋純先生の対談)

3. プログラミング教育のすそ野を広げるため、初心者を主な対象としたプログラミング教材の体験会を、明日会議内ワークショップや東京都教職員研修センター専門性向上研修プログラムの中で実施している。
4. 年に数回、集合研修を行い、会員間でプログラミング教育の実践発表を互いに見合い、研究を深める機会を設けている。
(2020年度よりコロナ禍の影響で自粛中)

IV 研究の内容

1. プログラミング教育のすそ野を広げるために、初心者、指導経験の浅い教員が抵抗感なく取り組みやすい教材を選定する。
2. 1.のような教員が取り組みやすい指導方法の開発と工夫を行う。
3. GIGAスクール構想を支えるクラウド教育サービスツールの効果的な活用方法を率先して工夫し、共有する。
4. オンライン会議システムを用いて、地域や校種などを超えた教員間の連携を実現する取組を行う。
5. ScratchやHour of Code、Google Blocklyなど、導入しやすく利用する機会が多いブラウザベースプログラミング教材の指導方法をより深め、初心者から中級者に当たる教員が指導の参考となる実践事例を増やす。
6. MESH、micro:bit、プログラミングカーなど、いわゆるロボット型といわれる教材を用い、プログラミングが現実の社会に動きとなって表現されることの良さを実感できる指導方法を研究する。
7. Scratchやmakecodeなどのビジュアルプログラミング教材を、プログラミング教育の導入に用いる指導方法を提案する。
8. ビジュアルプログラミングにある程度習熟した中級者を対象に、より高度で自由なテキストプログラミングへと移行させる指導方法や教材の工夫の仕方を研究する。
9. プログラミング教育未経験教員を対象としたワークショップを、東京都教職員研修センター主催の専門性向上研修や明日会議ワークショップで実践する。



V 成果と課題

《成果》

- Type_T、かながわのコード、APラボなど、志を同じくする全国の教員団体と連携をして、プログラミング教育明日会議をオンライン上で実践することができた。コロナ禍にあっても学び、研究を止めずに推進することができた。
- 全国各地の任意団体や企業と協力関係を得ることができた。

《課題》

- △ 以前からプログラミング教育に注目してきた、熱意のある一部教員に実践が留まったまま、すそ野が広がらない。
- △ 本団体の熱意を、都内すべての公立小学校へ広げ、地域や校種、教員の格差を児童や家庭に感じさせることがないプログラミング教育環境を実現することが課題である。

＜連絡先＞

団体名		東京都プログラミング教育研究会
代表者	所属	杉並区立天沼小学校
	職 氏名	校長 松野 泰一
	連絡先	03-3392-6428
事務局	所属	江戸川区立東小松川小学校
	職 氏名	主任教諭 鈴木 康晴
	連絡先	03-3652-7413

研究主題 広げよう！ 人とのかかわり 豊かな心

～児童文化手法を活用して～

I 団体の概要

東京都小学校児童文化研究会は、昭和35年に発足した。以来、長年にわたり、豊かな創造性や人間性を養うため、楽しい授業づくりの研究を行ってきた。具体的には、児童文化の手法を用い、児童の興味・関心を引き出しながら、集団活動の楽しさや素晴らしさを体験させることをねらいにして実践を積み重ねてきた。

今年度は、以下の組織により、6つの専門性を発揮しながら実践研究を行っている。

- | | | |
|--------|------------|---------|
| 1 学校劇部 | 2 童話部 | 3 ゲーム部 |
| 4 ダンス部 | 5 パネルシアター部 | 6 総合表現部 |

II 研究主題について

研究主題を達成するために大切なのは、コミュニケーション能力の育成である。児童文化手法には、こうした力を高める実践が様々ある。児童一人一人が自己表現を行いながら、学級や学年、班で一つの劇を完成させる「学校劇」や「劇あそび」、集団で行う「ゲーム」の実践、教師が自分の持つ得意表現分野を生かして授業を創る「総合表現」等である。これらの手法により、友達とともに創り上げる達成感や楽しさの共有体験を味わわせ、友達同士の「かかわり合い」を深め、豊かな学級集団を育てることができる。また、授業の導入や展開時に「遊び」的な要素を取り入れ、児童の学習への興味・関心を引きつけることも児童文化手法の重要な要素である。紙芝居や挿絵をさら

に工夫した「パネルシアター」の手法や、素話を用いながら児童を教材の世界に引き込む「童話」の手法、また、「ダンス」を行うことにより身体全体で表現する体験は、児童に学習の楽しさを味わわせ、その「心地よさ」がさらに児童の「学びへの意欲」を生み出す。こうした実践の中で、「児童の心を掴んで離さず、学びに結びつける授業づくり」をめざしている。

以上のように、児童文化手法を活用した授業を実践することで、児童のコミュニケーション能力が向上し、周りの人との関わりが豊かになり、「主体的・対話的で深い学び」が可能となるであろうと考え、本研究テーマを設定した。

III 年間計画

- ・定期的な研究会
第一回公開授業（総合表現部）特別支援学級
生活単元学習 単元名（活動名）「もっと友達のことを知ろう」
第二回公開授業（学校劇部）1年1組
市民科（道徳） 単元名（活動名）「こまっているともだちに」
第三回公開授業（童話部）2年1組
市民科（道徳） 単元名（活動名）「『あいさつ』って、すごい」
- ・実技研修会（学校劇部）
- ・東京都小学校児童文化研究会研究発表大会

Ⅲ 実技研修会

夏季休業中に、児童文化的手法を用いた学校劇について研修会を行った。各学校で行われている学芸会や学習発表会について、それらの基本的な進め方、児童の動きを引き立たせる演出や効果的な舞台設備の活用に関する講座、実際の脚本を舞台化する講座を2日間行った。2日間で約100名の教員が参加した。一つの脚本を演劇として上演するためのプロセスには、一定の決まりが存在することを確認するとともに、参加した先生方が演劇の指導法を学ぶことができた。

受講者アンケートの結果から、児童への指導に生かしたいという意見が多くあった。研修会の中で行った講座は以下の通りである。

- ・学芸会のためのシアターゲーム講座
(学芸会を成功させるために配慮したこと)
- ・学芸会のためのスタッフワーク講座
- ・脚本講座「きらめき商店街ラブソディ！」
- ・脚本講座「ラシードの冒険」



Ⅳ 研究発表大会

コロナ禍で、3年間、研究発表大会を実施することができなかったが、今年度は研究主題に沿って実施する。

第35回 全国公立小学校児童文化研究会研究発表大会

第57回 東京都小学校児童文化研究会研究発表大会

1 日時・場所

令和5年2月7日(火) 品川区立浅間台小学校

2 内容

○公開授業(6学級)

○実技研修会

(学校劇・童話・ゲーム・ダンス・パネルシアター・総合表現)

○記念講演

講師：劇団「柿食う客」演出家 中屋敷法仁氏

<連絡先>

団体名		東京都小学校児童文化研究会
代表者	所属	葛飾区立南綾瀬小学校
	職氏名	校長 宮内 和彦
	連絡先	03-3602-9597
事務局	所属	品川区立浅間台小学校
	職氏名	校長 高橋 健一
	連絡先	03-3474-2727

研究主題 「学校における性教育の在り方・進め方」

～性教育の手引きを基に～

I 団体の概要

本研究会は昭和54年に発足。学校における性教育の在り方について研修会や研究授業を通して研究を推進している。また、性教育に関する情報共有や課題解決にも取り組んでいる。

II 研究の目的

近年の子供たちを取り巻く環境の変化に伴い、実態や課題に応じた性を含めた心身の健康に関する指導の重要性が高まっている。

平成31年3月に改訂された東京都教育委員会発行の「性教育の手引き」を基に、子供たちが性に関する正しい知識を身に付け、適切な意思決定や行動選択ができる力を育むための指導方法の工夫を明らかにすることを目的とし研究を行う。

III 研究の方法

- (1) 「性教育の手引き」の理解を深めるための研修会
- (2) 各校における性教育の実践につながるよう、実践事例の紹介や会員相互の情報共有
- (3) 授業実践と研究協議

IV 研究の内容

- (1) 学習会「小学校における性教育の在り方」(オンライン)
多摩教育事務所 統括指導主事(当時) 美越 英宣 氏より、「性教育の手引き」を基に学習会を実施。



- (2) 講演会「性教育について考えよう」(オンライン)

東京都教職員研修センター認定講師 練馬区立旭丘小学校 主幹教諭 吉田光男先生の実践から、性教育の基本的な考え方や性教育の進め方についての講義および、4年「体の発達・発育」の実践事例から協議や意見交換を実施。

- (3) 全国性教育研究大会の参加

8月4日・5日に東京都で開催された第50回記念全国性教育研究大会2日間にわたり全体会と分科会I(発達段階別)、分科会II(課題別)に参加し、レポート報告。



- (4) 授業実践と研究協議

- ① 授業公開 「第4学年 体育科保健領域」 体の発育・発達
授業者 北区立八幡小学校 T1 第4学年担任、T2 校長 大田 裕子
- ② 授業公開 「第4学年 体育科保健領域」 体の発育・発達
授業者 練馬区立旭丘小学校 主幹教諭 吉田 光男
- ③ 授業公開(研究授業)の振り返りと指導講評
講師 東京都教職員研修センター 指導主事 町田 典夫 氏

V 実践事例

(1) 令和4年6月18日(土)

「第4学年 体育科保健領域」 体の発育・発達

授業者 北区立八幡小学校 T1 第4学年担任、T2 校長 大田 裕子

「性教育の手引き」を参考に、教科書に沿った学習計画を立てた。授業の前には、児童一人一人の知識理解の様子や認識などを捉えるためにアンケートを行い、



その結果を授業に生かした。

単元を通して、児童からは自分の心身の成長への喜びや、体のことをもっと調べたいなどの反応が見られ、一人一人の学びが深まったことがうかがえた。

授業後の協議では、器官等の名称や科学的な仕組み等の説明の難しさ、課題解決的な学習を取り入れた指導の工夫などについて協議を行った。

また、それぞれが自身の実践を紹介し合い、課題と感じていることや工夫していることなどについて意見交換を行った。



(2) 令和4年6月24日(金)

「第4学年 体育科保健領域」 体の発育・発達

授業者 練馬区立旭丘小学校 主幹教諭 吉田 光男

児童の実感を大切に、家庭で話し合われる性教育の授業を目指した学習計画を立てて指導した。

自校の、赤ちゃんが生まれたばかりの男性

教員と妊娠中の女性教員に協力を求め、2人の貴重な体験談から「新しい命が喜びをもって迎えられること」を実感し、自分の体の成長を肯定的に捉えられるようにした。

また、家庭でも性や命の誕生、命の大切さについて話し合ってもらえるよう、毎回の授業後に「お家の人に伝えたいこと、話し合いたいこと」を学習カードに書けるようにした。

今後も、児童が自分のこととして捉え、生きた知識を身に付け、生活に生かしていけるような力を付けられるよう、主体的・対話的で深い学びとなる指導の工夫をしていきたい。

VI 研究の成果と課題

<成果> ・「性教育の手引き」により基本的な考え方等を理解したことで、学校における性教育を具体的に推進する契機となった。

・授業を参観し合い、協議したことで、授業展開の見通しをもつことができ、実践意欲を高めることにつながった。

<課題> ・研究授業等の実践事例を積み重ね、研修を深めていく必要がある。

・全教育活動の中で性教育を推進していくためには学年や各教科等で指導実践や、系統的な性教育全体計画の立案など検討していきたい。

<連絡先>

団体名		東京都小学校性教育研究会
代表者	所属	北区立八幡小学校
	職 氏名	校長 大田 裕子
	連絡先	03-3900-8855
事務局	所属	北区立八幡小学校
	職 氏名	校長 大田 裕子
	連絡先	03-3900-8855